

## 多文化主義は先進的か？

——カナダ多文化主義と香港移民——

森川眞規雄

MORIKAWA Makio

### I.

カナダは「多文化主義」という用語を最初に使い始めた国であり、およそ30年にわたってその政策を成功裏に進めてきたといつてよい。この間にカナダにおける少数グループの立場は相当改善され、民族グループ間の交流も進められ、そして何よりもカナダの国民の間に民族間問題についての一般的な了解も形成されたといえる。確かにいまでも民族的な少数グループに対する偏見や異なったグループ間の軋轢はしばしば生じているものの、今日のカナダ人にとって露骨な人種差別ととられる行動をとることは極めて難しくなっているし、実際、カナダの国家的・社会的安全を脅かすほどの民族間の摩擦や暴動はほとんど生じていない。この点で、カナダの多文化主義はカナダと同様の多民族構成を持つ他の国にとって「模範的」なケースといえるし、カナダは民族問題の調整においてもっとも「先進的」な国家であると主張することもできるかもしれない。しかしながらこうした政策面での成功はあるとはいえ、このことは多文化主義という概念に瑕疵がないということの意味しないし、また、この政策がカナダのすべての国民から支持されているという意味でもない。むしろ多文化主義という概念は当初から様々な論争を伴ってきたし、その政策としての正統性、効力、妥当性は常に疑惑にさらされてきた。

おそらくもっともよく知られている議論は「同化主義者」と「リベラル」との間の議論である

う。Gwyn/Bissoondath と Kymlicka との間の近年の論争が明確に示しているように(Gwyn 1999, Bissoondath 1999, Kymlicka 1998, 1999)、多文化主義の中心的問題は、多文化主義が内包している少数民族文化を許容し支援する姿勢が、カナダの社会的統合を損なう有害なものかどうかということであろう。Gwyn や Bissoondath のような多文化主義の批判者にとって、答えは迷いなく「そのとおり」である。かれらにとって、多文化主義は、さまざまな少数民族グループや原住民グループが彼らの文化に閉じこもり (Gwyn 1999)、カナダの主流文化の伝統を尊重せず、他のグループと交流し溶け合わないことを許容することであり、このことを放置するなら、その結果は「個別文化ごとのカナダ社会の細分化」であり、それはカナダの社会的統合にとって「時限爆弾」を仕掛けるようなことなのである。かれらにとって、必要なのは多文化主義、つまりは「カナダの外にあるかつての故国」を強調することではなく (Bissoondath)、「国連のランキングで最も住みやすいとされた国をつくってきたイギリス系カナダの伝統と価値」を共有し (Gwyn)、少数グループがカナダへの、つまり今や彼らにとって「此処」であるカナダへの、完全な忠誠を持つことなのである (Bissoondath)。彼らの議論においては多文化主義以前の国家政策であった、少数グループによるイギリス系カナダ文化への同化こそが、カナダが統一ある社会であることを保障する唯一の方法なのである。

こうした議論に対して多文化主義を支持する、

いわゆる「リベラル派」は、多文化主義の積極的効果を強調し、多文化主義はカナダ社会の調和と統合を未来にもたらしさえるものだと主張する。Kymlickaのような「リベラル派」は、多文化主義は一見少数グループの文化を尊重しすぎ、彼らのカナダ社会への社会的統合を妨げているようにみえるが、実際には少数グループがカナダ社会に参画してゆくための唯一の方法であり、同化を強要することは少数グループを疎外し社会全体における民族的緊張を悪化させると主張する。また彼は、民族グループごとの細分化と分離主義について、同化主義者の主張にも関わらず、少数グループは実際に主流社会に参画しているし、そのことは多文化主義がもたらした双方の文化に対する寛容さによって可能になったのであり、少数グループは、当面彼らの文化を保持するとしても、「民主主義や人権や機会の均等」といった基本的なカナダの価値観は少数グループによっても共有されうるし、また実際にも共有されていることから、それが社会的な不統合をもたらすものではないと主張する (Kymlicka 1998)。

この近年の議論は、それなりに独自のロジックや、論者が考え出した新しい強調点(たとえば Gwyn の「国連のランキング」)を持っている。だが、そこに含まれる基本的な問題は新しいものではない。実際、類似の議論は多文化主義が国家政策として導入された 1971 年以来しばしば提起されてきたし、そのたびに国論を二分するほどに議論は沸騰していたのである。こうした議論の繰り返しの結果として、多文化主義は社会の統合にとって有害かどうかという問題があたかも多文化主義の唯一の問題であるかのように思われてきた。だが、注意しなければならないのは、これまでの議論で触れられたことがなく、またこれまでの議論で提起されたいかなる論点よりも重要な問題があるということである。その問題は、社会の統合の

ために文化的多様性は制限されなければならない、主流のイギリス系カナダ文化は他の文化に対して特別の地位を与えられてよいのかということである。この点で一見対立しているかに見える「同化主義者」と「リベラル派」の議論は、この問題を当然視していることによって、同じ基盤に立っているものといえる。多文化主義の批判者が同化主義者であるだけではなく、リベラル派もまた文化的多様性をそのまま認めることは社会の分解につながり、社会の統合・一体化は主流の文化と価値(民主主義、人権、機会の平等)を少数グループが受け入れることによってのみ可能だと考える点で、等しく同化主義者なのである。ただ、こうした「リベラル派」の姿勢は、単に民族問題に寛容で理解を示すふりをして、その実、民族の不平等についての潜在的信念を隠すという、主流社会のインテリの偽善と受け取ることはできない。むしろ問題は多文化主義そのものに内包されているのである。多文化主義が「文化のモザイク」を作り出してゆくというおめでたい一般的なイメージとは逆に、多文化主義は決して文化の多様性を丸ごと受け入れるものとして生まれたものではなかった。カナダにおいてさまざまな民族グループが増加し、彼らがイギリス系カナダ文化への同調に抗議するなかで、多文化主義はある程度の文化的寛容さを持ちながら、同時に文化的多様性のために国家的統合を犠牲にするようなことがない政策として作られたのである。その結果は、多様性と統合という軸の間で、文化的多様性は、(いみじくも多文化主義の公的目標に掲げられているように)、移民たちが「カナダ社会に全面的に参画する」までの移行的局面としてのみ認められるという、いささか妥協的なものとなったのである。この定義のもとでは、カナダ社会とはイギリス系カナダの主流文化に基づくものであり、全面的な参画とは同化を意味することはいうまでもないであ

ろう。いわばカナダの多文化主義は一種の「期間を延ばした同化主義」なのである。ひとたびこの多文化主義の同化主義的性格が明らかになれば、多文化主義という考え方が実は新しいものでもなんでもないことを理解するのは容易だろう。この政策が近代的で先進的だという一般的なイメージとは異なり、この考え方は1世紀以上さかのぼることができるのである。理解しておかなければならないのは、アメリカの歴史と同様、カナダの歴史において同化主義は最初からあったものではなかった。19世紀の終わりまでは文化的多様性という概念は社会の統合にとってマイナスの含みを持っていなかった（少なくともブリティッシュ・カナダでは。ただ、カナダではイギリス系カナダ人とフランス系カナダ人による多様性は別の意味をもっているが）。むしろ、それは Israel Zangwill がその劇のなかで朗らかに歌いあげた「人種のるつぼ」という罪のない楽観的な理想であった。多くの人々にとって、多様性は新世界に「新しい、より上質な国民」をもたらすものだったのである (Gleason 1981)。多様性が社会の統合と衝突するものと考えられるようになったのは、ようやく世紀の転換時のことであった。このころ大挙して押し寄せてきた東欧及び南欧からの新しい移民は、それ以前の移民とは明らかに異なった社会的・文化的性格を持っており、また、彼らの存在は、民族的集住、ゲットー、インナーシティの犯罪そしてスラムと密接にかかわっていた。これらの移民に反発して、そしてまた新移民の旧世界とのつながりが国家の安全を脅かすのではないかという20世紀初頭の恐怖心も相まって、一部の「土着主義者」は、移民たちに、彼らの文化を棄て、一方的かつ速やかにイギリス系文化に同化することを要求する運動を始めた。これはいささかヒステリックなイギリス系文化の優越性の叫びであり、イギリス系文化へ同化することを粗野に要求するもの

であったが、それだけが唯一の運動であったわけではない。「土着主義者」の運動の一方で、リベラルな知識人やソーシャル・ワーカー、そして社会改良家たちの運動があった。彼らの見方では、新移民の問題が彼らの低い適応力（教育程度、近代都市での経験のなさ、低い英語能力、貧困など）にあることから、同化を無理に押し付けることは、彼らを疎外し、一層自分たちのコミュニティに閉じこめることになるというものであった。むしろ必要なのは性急に彼らの文化を否定することではなく、教育と社会的訓練の助けで、彼らの新しい環境への適応力を緩やかに高め、ゆっくりと主流文化に参画させることであった。多文化主義の起源はまさにここにあったのであり、唯一の違いは多文化主義が公的政策になったことである。そして、この漸進的改革論は、「土着主義」に比べればはるかにリベラルで人道的ではあるが、その目的が「移民が主流文化に参画」できるよう助けることにあるかぎり、イギリス系文化の優越ははじめから前提されているといえよう。

おそらくこの百年も続くイギリス系文化の優越という考え方、およびそれに伴う、多様性は一文／一つの統合のために制限されなければならないという考え方が、ある種の少数グループにとって多文化主義が疑わしく欺瞞的なものに映る理由だといえよう。実際、多文化主義政策が始まったときから、少なからぬ少数民族グループのインテリたちは不信感を示し、多文化主義は少数民族グループたちを文化という局面でのみある程度表現させ、イギリス系カナダ人の優越を政治、経済やその他の領域で維持し、少数グループをずっと周辺化させておく欺瞞的なものとして背を向けてきたのである (Li 1988, Moodley 1983)。こうした批判は過度に少数民族の政治的反抗の臭いがし、またルサンチマンからくる主張とも見えるが、実際には強い論理力をもっている。この批判の論理的

な強さは、直接的に多文化主義は差別的であると指摘していることにある。イギリス系文化に他とは異なる特別な地位を与えることによって、多文化主義は明らかに他のどんな文化に対しても差別的である。そうした批判に対して多文化主義はそれが現実的な行政政策であるとしてその法的な正当性を主張するかもしれない。だが、人権というレベルでは多文化主義は正統性を主張できない。それは市民の文化的な背景を等しく扱っていないからである。また、たとえそうした文化の不平等な取扱いが国の文化的アイデンティティを定める憲章によって許されるとしても、やはりそれは機会の均等という観点において人権を侵害しているといえる。なぜなら多文化主義のもとでは、少数民族グループは「カナダ社会の参加者」となるためにイギリス系文化に適應するという、イギリス系カナダ人が定義上まぬがれている、余分な努力をしなければならないからである。この批判が明らかにしているのは、皮肉なことに、多文化主義という考え方は「土着主義者」であろうと「リベラル派」であろうとすべての同化主義者が一致してもっとも重要な文化的価値と考えている「民主主義、人権、機会の平等」という基本的なカナダの価値観に背馳しているということである。たとえば「土着主義者」がよくする、おおむねイギリス起源のカナダの歴史と伝統は後から来た新来者によっても尊重されるべきだという主張は同化を要求する根拠とはならない。カナダにいる何人にとっても国の歴史と伝統を知ることはよいことだろう。だが、このことは伝統が永遠に変化してはならないということではないし、新来者は新しい文化や伝統を持ち込んではいけないということでもない。先に来たものと同様、新来者も等しく市民権をもっているし、それが理解されれば、先に来たものが後から来たものにたいして権利として同化を要求するということは根拠を失う。なぜな

ら民主主義と人権の原理にてらして、先に来た移民と後から来た移民との相違がカナダ市民の平等を超えて優越を主張することはできないからである。こうした議論に対して、一部の「リベラル派」は多文化主義／同化主義を擁護する別な理由を持ち出すかもしれない。彼らは、イギリス系カナダ人は国の多数派であり、イギリス系文化が優越性を与えられるのは完全に民主主義に合致しているし、人民の共通の基盤である主流文化がなければカナダは統一性を失うと主張するかもしれない。また彼らは、ほとんどが第三世界から来た少数民族グループの文化に比べて、イギリス系文化は、他のグループさえそれに参加したいと思うような、最も現代的で先進的な文化であり、この文化が特別な地位を与えられるのは当然であるといえるかもしれない (Kymlicka 1998 p.39 参照)。一見もっともらしいこうした主張は、実際にはさほど強固なものではない。たとえば、もし偉大なカナダ的価値というものがあるとしても、他の諸文化を犠牲にしてひとつの多数派の文化を国民文化として選ぶことは唯一の民主主義的方法ではない。かわりに、文化の「比例代表」的なカナダ文化というものも考えられるだろう。そこではカナダの各グループがサイズ、能力その他に応じて各々の文化を持ち込むのである。この考え方では、「共通の基盤となる単一文化」というものはない。だが、単一文化が社会的統合をもたらす唯一の方法というわけではない。同化主義に先立つ「るつぼ」という考え方は、「比例代表」という考え方に非常に近いものであったし、人々はそれが「統合」に向かう道だと考えていたのである！そして最後に、「リベラル派」たちがイギリス系文化が最も先進的だと主張することは、彼らにとって自己否定のリスクを冒すことになる。というのも、もしイギリス系カナダ文化以外の文化がそれと同等か、さらに進んだ文化としてあらわれたと

したら、論理の必然として、イギリス系カナダ人は彼らが享受してきた特別な地位から降りてカナダの多くのグループの一つにならなければならないからである。これは彼らが絶対に受け入れられない状況であろう。本論の後半部で筆者はこの問題を再び取り上げ、こうしたありえなく思える状況が未来のカナダの多文化主義にとって現実的な重要性を持っていることを示すつもりである。だが、今のところは次のことを指摘しておけば十分であろう。つまり、ひとたびこうした基本的な批判が投げかけられると、多文化主義というものは多くのイデオロギー的な理屈をまとっているものの、論理的な基礎をほとんど持たない政策であることを露呈するのである。この点で、こうした基本的な批判を投げかける人にとって、多文化主義政策は、ある意味で、カナダの民族状況における前進であるどころか、異なった文化間の不平等を公的な政策として法的に定立していることにおいて後退なのである。

こうした基本的な批判は、しかしながら、最近までカナダ社会で一般に受け入れられるものではなかったし、こうした批判で提起された問題がまたある「多文化主義論争」で真剣に議論されたこともなかった。このひとつの理由は、多くの少数民族グループのメンバーが多文化主義政策を公然と批判することを避けてきたことにあるかもしれない。彼らは多文化主義が矛盾に満ちたものであることに気がついてはいたが、カナダにおける少数民族に対する偏見や差別の長い歴史を考えれば、多文化主義は「ないよりマシ」という意味で「進歩」だったのである。だが、少数民族が問題を避けたかどうかにかかわらず、多文化主義の議論の全体を覆っていたのは民族的多様性と国民国家についての根の深い固定観念であった。これまで論じてきたように、「カナダはイギリス系国家である」、「カナダは最良の先進国家であり、した

がって市民権はホスト側から恩恵的に与えるもの」といったタイプの論理は、程度の差はあれ多くのイギリス系カナダ人に共有されていたし、「リベラル派」さえカナダは先進的なイギリス系文化の国という考えを分かち持っていたのである。そして、「土着主義者」や「リベラル派」だけではなく他のカナダ人にとっても、国民国家についての固定観念、つまり、国民国家はそれによって国家的統合が達成されるひとつの文化的アイデンティティを持たなければならないし、その文化は優勢な多数派グループのものでなければならず、したがって、文化的多様性は制限されコントロールされなければならないという考えは至極当然のものであったのである。こうした状況の下ではカナダの民族状況においては多文化主義以外に他の道はないように思えたのであり、しかも国家的統合がケベックの分離主義に脅かされ続けてきたカナダにあっては特にそうだったのである。

多文化主義についての議論はおよそこのようなものだったのであり、1990年代の Kymlicka と Gwyn/Bissoondath の論争においても依然としてそうだったのである。だが、議論の場ではなく、具体的な現実において事態は変わってきているように思える。過去15年ほどの間に、カナダにおいてもそれ以外の世界においても、非常な変化が生じてきているし、こうした変化によって多文化主義／同化主義の考え方の根幹が次第に揺らいできている。そうした変化の一つは、イギリス系カナダ人の優勢というものが不明確になりつつあることである。人口でいえば彼らはもはや多数派ではない。過去数十年にカナダにきた大量の移民とヨーロッパ系カナダ人の低い出生率のせいで、イギリス系カナダ人は人口の3分の1程度を占めるにすぎないし、変化の大きい主要都市部では4分の1かそれ以下になっている。確かに彼らは単一グループとしてはいまだ最大のグループだが、もは

や国家を圧倒する存在ではない。このことはカナダ文化とは何かということに明らかに影響をあたえている。確かにイギリス系カナダ人は多数派ではないにしても、複数起源をもつ多くのカナダ人も基本的にはイギリス起源のカナダ文化を共有しているとは言える。だが、複数起源の彼らの場合、文化は緩やかに定義された「カナダ」文化であったし、また、さまざまな形で他の文化と混じっている。少なくとも彼らはイギリス系カナダ人としての単一の歴史や文化を担っているわけではない。イギリス系の優勢が退潮するに従って、現代的で先進的とされるイギリス系文化の優越という多文化主義／同化主義の前提も揺るがされている。多様化した価値体系、西洋と等しく現代的で先進的な非西洋社会の台頭、さまざまなポスト・コロニアルな思想といったものがみられる現代社会において、ヨーロッパ人やアメリカ人たちが先頭を走る単純な歴史の発展モデルはもはや成立せず、人々は西洋の覇権やイギリス系文化の優越といった考えを受け入れにくくなっている。イギリス系文化の優越だけでなく、国家や社会の統合が文化の多様性に優先するという多文化主義の前提も根拠を失いつつある。国民国家の優越という考えが広く受け入れられていたところは、人々の民族的アイデンティティは国籍に対して二次的な重要性しか持たないと単純に考えられた。国家にとって国民に完全な忠誠を要求することは容易であった。だが、人々が国境を越えて移動し交流するグローバル化の世界では、民族的アイデンティティは国民国家の枠内だけでなく国境を越えるものとして受け止められるのである。現在では、多くの人々が国境を越えて存在する特定の民族グループの一員として、また、同時に特定の国家の市民として、複数のアイデンティティを持つことはめずらしくない。そして、多くの場合、そのどちらかが他に優越または従属するものとは考え

られていない。こうした多文化主義の旧来の前提を覆す変化はさらにいくつも挙げることができるだろうが、明らかなことは、上述した変化はかつて自明に見えた多文化主義の前提そのものが今日のカナダの民族状況の基礎として成立しえないこと、または少なくとも実質的に根拠を失いつつあることを示している。おそらく、カナダが文化、多様性、社会的統合の間の関係を新しい方法で再考し再概念化しなければならない日は近い。そして、実際、新しい形で多文化主義の思考に挑戦している少数民族グループがいる。近年の香港からの中国人移民はそのよい例である。

## II.

カナダにおいて、香港からの中国人の移民の歴史は長い。19世紀にまとまった数の中国人の移民が始まって以来、移民の主要な供給先は南中国であり、多数は香港とその近隣であり、また、それ以外の地域から来た移民も多くは香港を経由して出国した。第二次大戦後の時期でも香港からはとどまらない移民の流れがあり、その数は年間約7000のレベルであった（Morikawa 1990）。こうした香港からの安定した移民の流れは、しかしながら、80年代半ばに突然変化する。植民地の将来の返還を議論するイギリス政府と中国政府の交渉が80年代初めに急に始まり、1984年には、1997年の香港返還を決めた共同宣言が公布された。この時期に、共産党政権下での将来の香港についての恐怖が香港住民の心を占めるようになり、香港からの移民の大量出国が80年代末以降続くこととなった。カナダは毎年これらの香港中国人移民の約半分を受け入れており、20世紀の終わりまでに約300,000人を受け入れた。これによって、トロント、バンクーバー、エドモントン、カルガリーなどのカナダの主要都市では、香港中国人の人口は全体の約5%に達するようになった。移民

の早い段階では、香港からの移民は億万長者やひどく裕福な人々で、彼らは一時的なシェルターとしてカナダを選び、また、安全のためのパスポートを目的として来たものと思われた。1988年に香港の大富豪の企業家であったデービッド・ラム（林思齋）がブリティッシュ・コロンビア州総督に選ばれたり、また同年に香港の億万長者である李嘉誠がバンクーバーの万博跡地を一括買収したことで、こうしたイメージは強まったが、移民が続く、香港出移民の数が香港人口の10%にあたる六十万人に達し、その半分がカナダに来ている中で次第に分かってきたことは、移民制限のために比較的富裕な階層の比率は多くなっているが、香港からの移民は、実際には、香港のあらゆる階層の含まれた移民であり、また彼らは単に一時的なシェルターを求めての移民ではなく、カナダ社会の一員として長期的に居住する意思でやってきた移民だということであった。

香港からの移民は億万長者ではないにしても、彼らはかつての中国人移民とは全く異なった性格を持っていた。昔の移民が、伝統的で明らかに低開発の中国農村から来た農民であったのに対し、彼らは全く異なった場所から来ていた。70年代半ばから80年代半ばまでの期間の飛躍的な経済成長の時期を通過して、香港は高度に先進的で近代的な資本主義都市の地位を達成した。1990年代初めには香港の一人当たりGDPは宗主国イギリスのそれを凌いでおり、もはや香港は低開発地域どころか主要な世界都市のひとつとなっていた。香港は巨大な経済システム、高度に発達した都市システム、高度な学歴と職業キャリアを持つ分厚い都市ミドルクラス、そして豊かな消費文化と洗練された都市ライフ・スタイルを伴う爛熟した社会になっていたのである。

そうした背景を持つ移民グループとして、香港移民のカナダ社会への適応もまたユニークで前例

のないものであった。特に経済生活において、彼らは極めて高い成功を収められることを証明した。彼らは、彼らが持ち込んだ資本、一般のカナダ人より相当高い学歴、職業スキル、香港で獲得した高い英語力、そして先進的な資本主義社会システムについての高い知識を背景に、比較的容易にホワイトカラー、さまざまな専門職、技術者、企業家、投資家としての地位を達成していった。もちろん新しい土地への移民に伴う地位の低下は不可避であったが、彼らはそれを最小限にとどめることができ、香港での地位に近いミドル・クラスの地位を実現した。だが、こうした高いレベルの経済的適応によって、彼らはカナダのミドル・クラスのライフスタイルを身に付け、それによって完全にカナダのミドル・クラスの生活に溶け込んだわけではない。このことは決して彼らが他のカナダのミドル・クラスの人々と仲良くしないということではない。実際彼らは職場でカナダのミドル・クラスの人々と付き合うし、都市ミドル・クラスの住む地域で他のグループと隣人として住んでもいる。ある程度まで彼らはカナダのライフスタイルを他のグループと共有しているのである。だが、そうした他のグループとの関係の一方、彼らが実際にしたのは、この新しい土地に彼らが完璧に香港でのライフスタイルを享受できる環境をみずから作り出していったことである。はじめは、中国雑貨や中華料理材料を扱う2、3の小規模なショッピング・モールであった（Lai 1988を参照）。だが、数年後には彼らは自分たちが必要とするものほとんどすべてを作り出した。香港から持ち込んだ十分な資本を背景に、彼らは香港の銀行（その一つは中国人も地元カナダ人も顧客にするカナダのトップ・バンクの一つとなっている）を導入し、テレビ局やラジオ局を創設し、さらに保険会社、カー・ディーラー、病院、レストラン、さらには漢方薬局や風水（占い）事務所

まで作り出した。こうした流れは極めて大規模で急速なものであったため、バンクーバーのようないくつかの都市では、香港中国人は現地社会に溶け込むどころか、自分たちの文化的飛び地 (ethnic enclave) を建設・拡大し、街全体を占拠しようとしているといった非難や妬みが噴出した (Canon 1989)。しかしながら注意しなければならないのは、香港中国人は彼らの社会施設を持ち込み、カナダに出現させたとはいえ、それは古典的な意味で定義される「文化的飛び地」とは全く異なるものであったことである。見逃しやすいことだが、彼らの文化施設は伝統的なチャイナタウンの性格を持たないし、また、かつてみられた相互扶助や自衛機能も持たない。彼らが作り出したのはカナダの主流社会のどのような文化施設も持つ近代的な機能である。唯一の違いは彼らがこの機能を香港中国人の好みに合わせて作り出したことである。この点で彼らが作り出したのは基本的に贅沢なものであり、このようにして彼らは自分たちのために既存のカナダのライフスタイルと並行する、選択可能な現代的な香港的ライフスタイルを作り出したのである。いわば彼らは近代的なライフスタイル自体を拡大し、その内の好みのものを選択するか、または、双方を享受できるようにしたのである。

ところで、こうした新しい土地での香港スタイルの社会施設の建設や香港的ライフスタイルの創造は、香港移民だけでなく、どこに住んでいるかにかかわらず香港の人々全体にもう一つの重要な意味を持つことになった。これまで述べてきたような変化はカナダに限ったことではない。香港からの移住者はほとんどどの移住先にも同様の変化を持ち込み、このことは結果として「香港社会」という言葉の意味そのものを変えてしまった。これはまさに香港の人々の驚異的な能力と彼らの膨大なエネルギーと努力の結果であった。香

港の中国への返還が決定されたとき、香港の人々は香港の未来について悲観と憂鬱にとりつかれた。香港の人々は、中国の支配のもとで香港経済が窒息させられ、香港は生氣のない中国の街になるという暗いシナリオを覚悟した。だが、実際に起こったことは全く逆だった。香港を離れた人たちはまもなく、カナダに限らず、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなどの主要都市に見事に香港的環境を再建した。香港自体も返還後も落ちぶれることはなかった。移住者の流出のために生じた人材の減少にもかかわらず、香港は生き延び、栄えることができた。そして、返還後香港が「中国化」されるという予想にもかかわらず、実際に生じたのは香港周辺の広東地域の「香港化」であった。別の論文で指摘したことだが (森川 1999)、香港に隣接する深圳は急速に事実上の香港の一部になったし、同じ変化は南広東からさらにはより遠い中国沿岸部まで拡大した。そうしたあたらしい香港拡大の結果として「拡大された香港エリア」とも呼べる広大なエリアが出現した。それは、香港をハブとして北米、オセアニア、アジアのさまざまな点をつなぐエリアであり、そのなかで香港の人々はくつろぐことができ、彼らにとってエリア全体が香港の人々が、時にはパスポートを持って、時にはそれもなく、自由に行き来できる一つの「生活圏」なのであった。このことは彼らが「浮草」であることを意味しない。カナダでもその他の地域でも、彼らは正常な市民として定着している。それでも彼らは一つの地点につながりとめられてはいないのである。香港人として彼らはカナダもその一部である「拡大された香港」にも属しているのである。

そうしたカナダにおける新しいタイプのアジア系/中国系移民グループとして、彼らの多文化主義やカナダの複数民族グループ状況に対する態度もユニークなものである。実際、彼らの態度は



多くの点で旧来の多文化主義の考え方と衝突し、それに挑戦し、その根拠を突き崩すものである。

カナダにおける近年の少数民族グループとして、彼らは、少数民族文化に寛容であり、それを尊重するとする多文化主義を歓迎しそうにみえる。だが、多文化主義に対する香港移民の態度はおおむね否定的であるか、少なくとも無関心である。彼らは多文化主義を利用して彼らの文化的活動に補助金を獲得しようとするのではないし、いかなる多文化主義の行事に関係することもまずない。地域の学校で開かれる少数民族言語のコースに子供をいかせることにも親たちは積極的ではない。子供の広東語能力を維持するために親たちは多少お金がかかっても私塾に行かせる。その理由の一端は、彼らが自分自身や自分たちの文化活動を維持してゆくに十分なほど豊かであることだろう。だが、これだけが理由であるわけではない。彼らはしばしば多文化主義は彼らのためのものではなくもっと弱いグループのためのものであるというし、また彼らが要求するのは多文化主義ではなく主流グループとの平等な取扱いだという。そしてこのことは彼らが自分の文化、カナダの主流文化そしてその両者の関係をどう考えているかを反映している。ここで重要なことは、彼らは、以前の他の少数民族グループとは異なり、自分たちの文化を保護が必要な、辺境の、伝統的な、弱いタイプのものだと考えていないということである。こうした理解は彼らの経験から直接生じてきている。そうした経験の一側面は彼らが香港で経験したものである。先に簡単にふれたように、香港は70年代から80年代にかけて驚異的な経済成長をとげた。この変化に当然ながら伴ったのは前例のないスケールの社会変化であった。この期間を通じて香港は多少とも戦前期の広東省の街に似た街から超モダンな資本主義世界都市に変化した。この変化のあとは香港の人々の生活はもはや

古い広東のものではなく、近代的な高層アパート、香港の幾百もの摩天楼の中で行われる国際的なビジネス活動、ワールド・クラスのショッピング・モールやレストランに象徴される都市ミドルクラスの生活となった。ごく短い期間にかつて強力に人々を結束させていた、同じ地域や同族などの伝統的な紐帯は弱まり、個人の能力や達成、自己責任、効率、清潔さプライバシー、洗練されたマナーなど、おおむね現代資本主義都市に共通した近代的な価値観やエートスが自然で重要なものとして受け入れられるようになった。こうした変化の中で、香港の人々が彼らの社会がどのような近代的な社会にも負けない高度に近代的なものだと認識したのは当然であった。しかも、こうした認識と自信は彼らが「西洋化」を成し遂げたという単純な自信ではないことに注意しなければならない。そこには彼らが自身の近代化のユニークさについてもつ自信がある。ちょうど日本の近代化が単なる西洋化ではなかったように、香港の近代化もユニークなものであった。高度に近代化した後でも、彼らは決して西洋型の厳格な個人主義を受け入れようとはしなかったし、また、最小限の核家族が理想的とも思わなかった。彼らが代わりに選択したのは、人々を絶対的な孤独に追いやることのない「緩やかな個人主義」であり、また「強力だが個人を抑圧することのない」ある種の「家族主義」であった (Luk 1995)。そしてこうしたユニークさは他の文化の局面でも同様であった。広東語ポップス (カントポップ) や香港映画が強力に例証しているように、香港は高度に近代的だが同時に非広東世界の人さえ認める強い文化的・美的特質をもった都市文化を創造したのである (Morikawa 1999)。香港の人々が自信を持つようになったのはこうした近代性とユニークさであり、この自信はしっかりした裏付けをもつものであった。早くも1970年代の終わりに香港と大陸

の交流についての規制が弱められ、香港の人々が戦争以来初めて大陸の人々を見たとき、彼らは同郷人を全くなじみのない、むしろ違った世界から来た中国人と受け止めたのである！

こうした香港の人々の自身の文化に対する自信はカナダにおいて変化するどころか、ある意味で、移民後より一層強められたといえる。当初、移民たちの心の中には、彼らの自信は幻であり、彼らが「本物の西洋近代」に直面すれば消えてなくなるかもしれないという恐れがあった。だが、そうした恐れは長くつづかなかった。移民たちが見出したのは、カナダでの彼らの生活の中でびっくりするようなことは何もないということだった。彼らがカナダで見る物は多少ともなじみのあるものだった。交通システム、通信システム、公共サービスシステムやその他の都市システムは彼らが香港で持っていたものと違いがなかったし、郵便システムなどの一部ものは彼らが持っていたものよりはるかに遅れていた。また、経済システムやビジネスの仕方もおおむね変わらず、この点で彼らは国際経済のクロス・ロードである香港のシステムの方が多少とも進んでいると感じ、このため、彼らは彼らの職業経験はカナダに移転可能であることに気がついた。彼らはまた、カナダ人の持つ市民的価値観も基本的に彼らのものと変わらないことに気づいた。家庭生活のパターンもほとんど同様であった。カナダ人も香港中国人も働くために街の中心に通勤するし、買い物には近所のモールに行く。夜にはテレビを見、週末は家族と過ごす。もちろん違いもある。カナダ人は週末にコテージに行くが、中国人は飲茶レストランに行く。カナダ人はホッケー好きだが中国人はサッカーだ。カナダ人は長い夏の夕方をポーチでビールをのんで過ごす。中国人は麻雀をする。だが、香港移民にとってこれらはそれぞれの文化が持つ好みであって、いわば各文化の「その土地独

特の、部外者には奇妙に見える物事の仕方」(parochial idiosyncrasy) に過ぎず、それならそれぞれのグループは自分の好みを続ければよく、どちらかがその好みを変えなければならないというものではないのである。つまり、彼らが見出したのは、カナダ社会とその文化は香港のそれと同様に近代的であり、両者に優劣の関係はないのである。たとえばカナダの人権保護は香港中国人の称賛するところだが、一方で、同じ文化は香港中国人から見ると歴史的な深みに欠け、その個人主義は行き過ぎたものと思える。だが、このことはどちらかが優れているとか劣っているということではない。どちらも等しく近代的であり、両者の違いは、いわば、近代文化の「地域的バリエーション」なのである。

香港移民たちの自身に対するこうした自信と自負は二つの文化の優劣についての見方だけではなくカナダにおける彼らの文化の位置についての見方にも反映されている。実際彼らは自身の文化を少数民族グループ文化だとは全く思っていないのである。ちょうど彼らが自文化を辺境の、伝統的な弱い文化ではなく、先進的で、近代的な資本主義文化だと考えているように、香港文化は彼らにとって、主流・多数派文化の強い圧力のもとで生存を図る必要があり、それゆえに多文化主義のような政治的配慮によって支えられなければならないような少数民族文化であるどころか、香港を発信地とし、香港、南中国、東南アジアの一部、そして北米の一部にまで広がりつつある世界的近代性の一部なのである。この点で、彼らにとって、香港文化は、ヨーロッパ、北米、オセアニアにまたがるもう一つの世界的近代性の一部であり、また、香港文化と同様に、脆弱で自己防衛的な多くの少数民族文化とは異なり、活発で強力で、常に自己創出と洗練の過程を続けているカナダ文化と完全に対等なのである。

こうした考え方によれば、香港移民にとってカナダの多文化主義とその下にある同化主義的思考は彼らに全く当てはまらないだけでなく、考え方そのものが全く誤ったものである。彼らにとって多文化主義という考え方は、カナダ人が他の文化と同化しなければならない可能性とは言わないまでも、他にも近代文化が存在するかもしれないということを想像すらできない、時代遅れで自己満足に過ぎないヨーロッパ中心主義に由来するものなのである。そして、カナダ文化と香港文化が等しく近代文化であり、それゆえ、どちらかがどちらかに同化するといったものではないことがひとたび理解されれば、近代文化として多くをカナダ文化とも共有している香港文化は、カナダの統一にとって異質でも、障害でも、脅威でもなく、むしろ、カナダの重要な一部として、他の文化と手をたづさえて、将来のカナダ社会を推進し強化するものなのである。そして多くの香港移民の言葉を借りるなら、このことはカナダの人々が、率先して、またはいやいやにせよ、すでに受け入れていることであり、それはすでに現在のカナダ社会において実現されていることなのである。そうでなければ、香港からの移民第1世代のデービッド・ラムがブリティッシュ・コロンビア州の総督に指名されることはなかったし、また、同じく香港出身であり、自身を「呉夫人」と呼んでいたエードリエンス・クラークソン夫人（Ms. Adrienne Clarkson）がカナダ連邦総督になることもありえなかったのである！

こうした香港移民の考え方は、また、かれらのエスニック・アイデンティティや国籍に関する考え方にも反映されている。大多数の香港移民はカナダ国籍を申請し、取得しているが、彼らは香港中国人としての強いエスニック・アイデンティティを保持している。だからといって、彼らが国籍を重要視していないというわけでも、カナダ市民

であることに関心がないというわけではない。むしろ、彼らは良きカナダ人としての彼らのイメージについて神経質でさえある。一般に、彼らは他の多くのカナダ人と同様のごく普通のカナダ人に見えるよう注意を払っているし、また彼らはカナダにおいて目立たないようにしている傾向がある。移民たちの中でも非常に豊かな人々も、目立たないために、香港ではあたりまえのロールス・ロイスを買わず、目立たないベンツを買うし、一般の移民たちも自立した、勤勉で善良な市民と思われるよう注意している。この点で、彼らは一つのグループとしてとらえられることさえ避けている。彼らは集団的利害の追及を避けようとするし、エスニックな団体をつくらず、他の中国人グループからも離れていようとさえする。このようにして、彼らは、彼らが少数民族グループではなく、平等な取扱いのみが適用されるべき、近代的で独立したカナダ人であることを主張しているのである。しかしながら、移民たちのこうしたカナダ市民としての意識は、彼らの香港中国人としての意識を否定するものではない。逆に、彼らには国籍のために彼らのエスニック・アイデンティティを抑圧する意思はない。彼らは職場では他のカナダ人と気楽に自然に付き合っているが、プライベートな生活では彼らは香港式ライフスタイルを変えることはない。彼らは広東語を話し、中華料理を食べ、中国語新聞を読み、中国語のテレビ番組を見、付き合うのもっぱら仲間の香港移民とである。そして、この点で重要なのは、彼らの帰属意識はカナダの香港コミュニティに限定されていず、むしろ彼らは先に述べたより広い香港中国人の世界規模のネットワークに帰属意識を持っていることである。彼らは広東語を話し、中華料理を食べ、中国語のテレビを見るが、それは小さな「飛び地」に閉じ込められ、自分たちの心配だけしている少数民族としてではなく、より広い香港

社会の一員としてなのである。彼らが中国語新聞を読み、中国語テレビを見るのはカナダでの彼らのコミュニティで何が起きているのかを知るのではなく、全香港で生じていることを知るためなのである。彼らの中では香港でさえこの「社会」の一部にすぎない。もちろん香港は最大で重要な部分だが、彼らが属しているのは香港自体よりはるかに広い。そうした帰属意識は彼らの職業生活に最も明瞭にあらわれている。先に述べたように、香港移民たちはカナダの労働市場によく適応している。だが、ひとたび移民たちが職業機会を考えると、彼らの可能な市場はカナダに限られているわけではない。彼らが職業機会を「拡大された香港」、つまり、香港、中国、マレーシア、台北、そしてトロントやバンクーバーに広げて考えるのはごく当然であり、実際彼らはそのように職業キャリアを重ねてゆく。極端な場合には、彼らは一か所に市民権をおき、そこに家族を住ませ、自身は香港やそれ以外の地に身を置き、太平洋を越えて「通勤する」、いわゆる「太空人」(宇宙飛行士の意)にもなる。一部のカナダ人にとって、こうした姿勢やライフスタイルこそ、彼らが香港移民を忠誠がなく、カナダに「溶け込まない」、カナダ国籍を「保険」とする輩と非難する点なのである。だが、香港移民の側からすれば、そうした非難は当てはまらず、誤ったものである。まず、彼らにとって、あるエスニック・アイデンティティを持ちながら同時に国籍を保持することは可能だし両立することである。彼らが主張するように、主流文化がカナダの他のどの文化よりも優秀なら、カナダ市民になることは多少とも移民がその文化を棄てることを意味するだろう。だが、香港文化が主流文化に劣らなければ、香港文化をもつこととカナダ国籍を持つことは矛盾しない。しかしながら、実際の非難の根拠はここではなく、国境を越えて広がるエスニック・アイデ

ンティティを持つことが、特定の国家の国籍を持つことと両立するかという点であろう。この説得性のありそうな非難に香港移民たちはしばしば、多少からかうような仕方で、問題の状況は、カナダのアイデンティティを保ちながら、現地の社会に貢献している国外在住のカナダ人 (expatriate) とさほど変わらないし、しかも、これらのカナダ人についての非難は聞かないのだから、ある移民グループが同じ行動をとったからといって非難するのは不条理であると反論する。だが、この修辭的な反論を越えて、彼らは議論をさらに進める。彼らは、この国際移動とグローバリゼーションの現代世界では、人々はどんどん複数のエスニック・アイデンティティや国家アイデンティティを持つようになっており、国籍が他を圧して完全な忠誠を求めるという単純な考えはもはや成り立たないと主張する。むしろ、国家アイデンティティは他のアイデンティティを許容する道を探すべきであり、彼らのケースはまさにそれだという。彼らの主張によれば、彼らは国民国家の時代の移動者ではなく、グローバルな時代の国際移動者であり、そうした彼らとしてはエスニック・アイデンティティと国籍の間に最適点を求めるのは当然であり、実際にも、彼らは一般の労働者としてではなく、太平洋貿易の専門家や国際的に転移可能な技能を持つプロフェッショナル、国際貿易での投資家など、そのどれもがグローバルな時代の移動者としてのみ獲得できる技能を持つものとしてカナダに受け入れられているのだから、こうしたあり方は実質的にカナダが受け入れていることだと述べる。彼らはさらに、彼らが香港人として「拡大された香港」でビジネスをし、直接的な利益や税金の形でカナダに富をもたらしていることで貢献していると主張する。彼らにとって、カナダが彼らに国籍がゆえに全面的忠誠を求めるのは不条理であり、それは単にカナダ市民権という概念自

体が世界で今生じていることについていけないことを意味するにすぎない。そして、この議論は、カナダのように基本的に二重国籍を認め、実際に「企業家」「投資家」「専門職」などの新しい移民カテゴリーを作って香港からの移民を勧誘している国家において、相当程度正当化されるものと言ってよい。

こうした思考とそのグローバルな移動者としてのアイデンティティから、一部の香港移民たちは国籍を全く新しい仕方にとらえようとし始めている。声高に表現されることはないが、相当数の香港移民たちは、国籍が「建国グループ」、つまり主流グループから移民を希望する者に恩恵として与えられるものという考えは、すべてのよきものが主流派の手にあり、移民はそれを分けてもらうのみという場合にのみ正当化される、時代遅れな考えだと指摘する。彼らはそうした考えは公平ではないと指摘する。なぜなら、過去においても移民は移民たちに利益をもたらすのみでなく、新しい労働力、新しい知識や技術、さらには人口のより良い比率というかたちでホスト社会にも利益をもたらしてきたし、しばしば国家が移民を選ぶのではなく移民が国家を選ぶ位置にあることもあるこの国際移動の世界においてはより一層そうだからである。そうした状況では、移民と国家との関係は、国籍と移民の忠誠と貢献が対等ベースで交換される平等な関係になるべきなのである。こうした思考のもとに彼らが提案するのは、国籍が市民の全面的で生涯にわたる忠誠を要求するという概念とは全く異なり、いわば株式の購入・保有といった仕方と考えられた国籍の概念である。この考え方では、人々は物質的、知的、経験的その他の保有する資源を特定の国からの報酬・配当を期待して「投資」するのである。もしも国家が十分な報酬を保障できなければ、人々は投資を引き揚げ、他の国に投資を向ける。だがもし国家が信

頼するに足ることを示せば、「株主」は国家により忠実になるだろう。皮肉な論者によれば、これこそが「統合の生じる場所」なのである。

### III.

これまでに述べられた香港移民の事例、その社会的姿勢や意見は、明らかに、多文化主義の概念そのもの、および、そこに含まれる文化的多様性、文化的統合、そして国民国家としてのカナダについての考え方と衝突するものである。イギリス系文化の優位についての明確な、または、暗黙の了解に対して、彼らは明確にその優位を否定し、彼らの文化を主流文化と並ぶものとして定立する。彼らは、国籍や市民権が人々に完全な忠誠を求める最高の権利を持つものとしてではなく、むしろそれらが他のアイデンティティと交渉可能なものとして提示する。また、彼らは社会的統合を、支配的グループによってもたらされるものではなく、さまざまなグループが参加する結果として生じるべきものと主張する。多くのカナダ人にとってこうした主張は非現実的と思えるだろうし、また、香港移民の事例と彼らの姿勢は例外的であり、受け入れがたいもののように映るだろう。一部の人々にとってそれはカナダ国家とそのアイデンティティを損なう反逆的な考えと思えるだろうし、また、より穏健な人々の中にも、カナダのエスニック・グループの多くは、香港移民とは異なり、今日も依然として経済的・社会的に弱い存在であり、彼らにとって文化的平等性や平等な取扱いを主張することよりも、国家によって文化を認知され、保護されることの方が重要であると述べるだろう。彼らにとって、香港移民の主張することは援助を必要としない強い少数グループの傲慢で自己満足的な主張と映るのである。実際、こうした見方にはある程度の真実が含まれているし、まさにそれゆえに多文化主義は先進的な

民族政策としての成功を主張できていた。しかしながら、香港移民が提起した問題は、エキセントリックで孤立した少数グループの主張どころではなく、国際化とグローバリゼーションの現代世界にあるカナダの社会と国家にとって極めて重要であるし、近い将来にはより一層そうなるであろう。明らかに、イギリス系文化の優位という主張を維持することは日増しに難しくなっている。この点で香港移民は孤立した存在ではない。彼らの見方は、もちろんさまざま程度ではあるが、マレーシアやシンガポールからの中国人移民にも広く共有されているし、類似の認識は、インドや中東やラテン・アメリカからのプロフェッショナルのような他のグループにも共有されている。これらのグループは、それぞれに、近代性や近代的価値システムについて独自の理解をもっており、西洋またはイギリス系のそれのみが唯一のものではないと主張している。また、こうした流れはこれらのグループに限られたものではない。今日の電子コミュニケーションの世界にあっては、第三世界出身者であっても近代性や先進社会がいかなるものであるかを容易に理解できるし、急速にそれに追いつくことができ、やがて彼らもまた弱い少数民族グループとしてではなく現代カナダ社会のフル・メンバーとして扱われることを要求するだろう。また、国籍についても、例えば上記のミドル・クラスやプロフェッショナルたちは伝統的な国籍の考え方を受け入れないだろう。どこにでも移動することが可能な国際的に移転可能なスキルを持つ、ジェット機利用の移動者、リッチモンドの言を借りるなら「本性的継続移動者」(transilient) (Richmond 1994) として、彼らは彼らの考えるエスニックまたはその他のアイデンティティと完全に両立する国籍の概念のみを受け入れるだろう。この状況がカナダや他の先進国にとって重要なのは、こうした人々が決して部分的な、無視で

きる移民グループのカテゴリーではないということである。世界規模の厳しいハイテク競争、ビジネス競争の時代において、それぞれの国が国内の労働市場だけではなく、国際市場から最良の人材を獲得することは決定的に重要になっている。さらに、同じ論理は他のグループについてもいえる。カナダだけではなく現代世界のどこにおいても、世界の移民システム全体がより二方向的、循環的になってきていることから (Basch, Shiller and Blanc 1994)、第三世界からの移民労働者のようなより恵まれないグループもまた国籍と別個にエスニックアイデンティティを維持することがより一般的になってきている。こうした状況では、国家が移民に対して彼らのエスニシティを抑えて全面的な忠誠を求めることはより一層困難になってきている。プロフェッショナルの場合と同様、国家にとって国際競争を生き延びるためにこうした低コスト労働力を確保することは決定的に重要だからである。

こうした新しい変化は、エスニシティ、国籍、そして国家的統合についての伝統的思考を現状のまま維持することを困難にしている。特にカナダでは、今日でも全人口の40%を構成する民族的少数グループが間もなく50%を超えることから、この状況はさらに加速しつつある。こうした流れのなかで、カナダは、その民族政策にかかわるすべての概念を改定し再定義しない限り、ごく近い将来、自国が他国のはるか後方に置き去られている状況に直面することになるだろう。そしてその時には変化のありかたは香港移民が提起したに近い方向、つまり、国籍が株式の取得のように理解され、理の当然として株主の文化が平等に取り扱われるような方向に向かうだろう。こうした変化は必ずしも社会の各文化に沿った「細分化」や「時限爆弾」の爆発に向かうわけではない。香港移民の場合にみられたように、さまざまな移民によっ

て持ち込まれた多様な近代性は衝突するものではない。近代性ということにおいてそれぞれは共存し相互に受け入れあうことができる。そして、どの近代性が、また多様な近代性のどの部分が長期的に生き延びることができるかは文化的な「市場メカニズム」にゆだねられる。また、同じことは第三世界から持ち込まれた前近代の伝統的文化についてもいえる。これらの文化は、従来そうであったように、既存のカナダの文化と衝突するだろう。だがここでも「市場メカニズム」は働く。Kymlicka がかつて指摘したように、もし近代性というものがすべての人にとって良いものであり、利益をもたらすものであるならば、少数民族文化の人たちも参加するはずだからである。こうしたすべての点において、変化は「既存の統合を保持する」ことから「あるべき統合を探す」ことへと向かうだろうし、このことはカナダにおいて新しいことではない。先に指摘したように、「るつぽ」は「あるべき統合」を探そうとする考え方であった。そして、同化主義の時代を過ぎ、将来に向か

っても、カナダのような移民で構成されている国においては、統合とは「将来あるべきもの」なのである。この点で少なくとも、国民国家の枠組みの中で多様性と統合の間の最適点を求めようとする真剣な努力であった多文化主義は、遅かれ早かれ、多様性や国籍や国家というものが相対的なものとなるグローバル化する世界においてカナダの統合を求める新しい考え方と努力に道を譲ることになろう。

〔付記〕

\*この論文は筆者が2004年3月に本誌第8号に発表した論文、When Multiculturalism Appears Obsolete: Multiculturalism and Hong Kong Immigrants in Canada の翻訳である。いささか古い論文をあえて翻訳したのは、本論文発表後、複数の同学の研究者から、英文では学部の授業に使わずらく、翻訳が欲しいという声があったことによる。筆者自身も学部での使用に躊躇したことがあり、翻訳した次第である。論文の内容はかなり抽象的・哲学的なものであり、その点でさほど古びていないと思う。読者の判断を待ちたい。

〔参考文献〕

Bibliography

Basch, L. Shiller, N. and C. Blanc,

1994 *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments and Deteritorialized Nation-States*, Gordon and Breach, Amsterdam.

Bisoondath, N.,

1994 *Selling Illusions: The Cult of Multiculturalism in Canada*, Penguin Books, Toronto.

Cannon, M.,

1989 *China Tide: The Revealing Study of the Hong Kong Exodus to Canada*, Harper & Collins, Toronto.

Government of Canada,

1971 *Statement by the Prime Minister in the House of Commons, October 8 1971*.

Gleason, P.,

1981 'American Identity and Americanization' in *Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups*, ed. By S. Thernstrom, Harvard University Press.

Gwyn, R.,

1995 *Nationalism without Walls: The Unbearable Lightness of Being Canadian*, McClelland and Stewart, Toronto.

Kymlicka, W.,

1998 *Finding Our Way: Rethinking Ethnocultural Relations in Canada*, Oxford University Press, Canada.

Lai, D. C. Y.,

1988 *Chinatowns: Towns within Cities in Canada*, University of British Columbia Press, Vancouver.

Li, P.,

1988 *Ethnic Inequality in a Class Society*, Thomson Educational Publishing, Toronto.

Luk, B.,

1995 'Hong Kong People's Perception of Their Identity' *The Identity of Hong Kong : Proceedings of a Workshop Canada and Hong Kong Project*, Joint Center for Asia Pacific Studies, York University and University of Toronto.4

Moodley, K.,

1983 'Canadian Multiculturalism as Ideology' *Ethnic and Racial Studies* 6(3) : 320-32.

Morikawa, M.,

1990 'Toronto no Honkonjinn Imin' in T. Ayabe (ed.) *Bunkajinruigaku* 7, Akademia Shuppan, Kyoto. (in Japanese)

Morikawa, M.,

1998 a 'Migration from Hong Kong and Asian Modernity : Perspectives from Canada' in S. C. H. Cheung (ed.) *On the South China Track*, The Chinese University Press, Hong Kong.

Morikawa, M.,

1998 b 'Kindaisei no Keiken : Honkon Aidentiti Saikou' (Experience of Modernity : A Second Thought on Hong Kong Identity), in *Minzoku de Yomu Chuugoku* (China from Ethnic Perspective). Asahi Shinbunsha, Tokyo (in Japanese).

Morikawa, M.,

1998 c *Senjuumin, Ajiakei, Akadian* (Natives, Asians and Acadians) Kourosha, Kyoto, (in Japanese).

Richmond, A. H.,

1988 *Immigration and Ethnic Conflict*, MacMillan, London.

Skeldon, R. (ed.)

1994 *Reluctant Exiles? : Migration from Hong Kong and the New Overseas Chinese*, Hong Kong University Press, Hong Kong.